

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長
(公 印 省 略)

病害虫発生予察技術情報について
令和5年度病害虫発生予察技術情報第7号を公表したので送付します。
令和5年度病害虫発生予察技術情報第7号

さとうきび新植夏植えにおけるメイチュウ類の防除対策について

さとうきび新植夏植えにおいてメイチュウ類の被害が発生しています(図1)。メイチュウ類の食害は生育茎数の減少や食害痕からの病害発生による品質低下など多大な影響を与えます。生育初期の茎葉への水和剤等の散布や培土時の粒剤散布による防除を徹底しましょう

1 発生生態および被害

(1) カンシャシンクイハマキ (図2左側)

- a 卵は葉や茎に1～数卵ずつ産み付けられる。ふ化幼虫は葉鞘の内側を下降して節部の芽や根帯から食入し生長点を加害し芯枯れを起こす。老熟幼虫の体長は22mm程度で体色は淡黄色を帯びる。
- b 沖縄では年6～7世代を重ね、周年発生する。
- c 被害はほ場内に散在的に発生する。

(2) イネヨトウ (図2右側、図3)

- a 卵は葉鞘の裏側に卵塊で産み付けられる。ふ化幼虫は集団で葉鞘内部を食害し3～4齢になると他の茎に分散、葉鞘の外側から孔を開けて食入し、生長点を加害して芯枯れを起こす。老熟幼虫の体長は30～40mmで体色は薄紫～ピンク色を帯びる。
- b 沖縄では年5～7世代を重ね、周年発生する。
- c 初期被害はほ場周縁部で見られ、ほ場内でスポット状や畝に沿って被害が拡大する。被害が集团的に起こるため、生育初期に加害されると坪枯れを起こすこともある。

2 防除上注意すべき事項

- (1) ほ場および周辺の除草を徹底する。
- (2) 発芽前期から有効分げつ期の芯枯れ防止のため、食入初期の幼虫を対象に薬剤防除を行う。
- (3) 植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する(表1、2)。
- (4) 茎葉への水和剤等の散布は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。MEP単独成分の剤は感受性低下の報告があるため、他の剤を中心に散布する(表3)。
- (5) 薬剤防除後、2～3週間において再度防除を行うことで防除効果が高まる。
- (6) 被害の多い地域では薬剤による一斉防除を行う。



図1 芯枯茎



図2 メイチュウ類



図3 食害状況(イネヨトウ)

表1 植え付け時薬剤の例

農薬の種類	使用方法	使用時期	10a使用量	使用回数
クロラントラニプロール粒剤	植溝土壌混和	植え付け時	4～6Kg	1回
フィプロニル粒剤	植溝処理土壌混和	植え付け時	4～6Kg	1回
クロチアニジン粒剤	植溝処理土壌混和	植え付け時	6～9Kg	1回
カルボスルファン粒剤	植溝処理土壌混和	植え付け時	6～9Kg	1回
ベンフラカルブ粒剤	畝溝土壌混和	植え付け時	6～9Kg	1回

表2 培土時薬剤の例

農薬の種類	使用方法	使用時期	10a使用量	使用回数
クロラントラニプロール粒剤	株元散布	生育期但し最終培土まで	4～6Kg	1回
フィプロニル粒剤	株元処理土壌混和	培土時	6Kg	1回
クロチアニジン粒剤	株元散布	収穫30日前まで	6～9Kg	3回以内
カルボスルファン粒剤	株元土壌混和	培土時	6～9Kg	1回
ベンフラカルブ粒剤	株元散布又は株元土壌混和	培土時	4～6Kg	1回

表3 茎葉散布薬剤の例

農薬の種類	使用方法	使用時期	10a散布液量	希釈倍数使用量	使用回数
クロラントラニプロール水和剤	茎葉散布	収穫30日前まで	100～300L	5000倍	3回以内
クロチアニジン水和剤	茎葉散布	収穫30日前まで	100～300L	2500倍	3回以内
ダイアジノン乳剤	茎葉散布	収穫90日前まで	100～300L	800～1000倍	2回以内

※表1、2、3は2023年11月22日時点の登録内容より作成。散布は農薬のラベルを良く確認してから行う。
 ※クロラントラニプロール粒剤、フィプロニル粒剤は栽培期間中は植え付け時か培土時の1回散布となる。

詳しくは県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★

TEL：(本所)098-886-3880、(宮古駐在)0980-73-2634、(八重山駐在)0980-82-4933
 ホームページアドレス： <http://www.pref.okinawa.jp/site/norin/byogaichubojjo/index.html>